新人記者の高校野球汗まみれ

読売新聞記者
野倉早奈恵（のくらさなえ）

ただいまの時刻、午前1時。読売新聞水戸支局内で一人カタカタとキーボードをたたいている。7月、「読売新聞水戸支局記者野倉早奈恵」としての生活がスタートして三カ月が過ぎた。毎日が初めて尽くしで、「初めてのストレス痩せ」というおまけまでくっついてくる始末。

そんな私が目下ぶち当たっている壁は「夏の高校野球」だ。この高校野球地方予選取材が新人記者にとっては「登竜門」なのだ。それ故に、私は茨城県内百十三校の球児相手に四苦八苦している。

毎日、ざっとこんなふうに――。

朝七時半起床（何だ、以外に遅いじゃないかなんて言わないでほしい）。一通り各紙に目を通す。午前九時半には球場到着。10時の試合開始に備えスコアーブックに書き込みを始める。そう、このスコアーブックというのが、ネックなのだ。野球をやっていた人ならワケないだろうが、私はもう何度も大失敗をしでかしている。

スコアーブックにはさまざまな記号やら符丁がある。例えば「K」は三振、「△」は犠打、とかね（ギダって何ナノ、と最初の頃はそんな調子）。まずこの独特の記号たちを覚えるのが大変なのだ。そして、これが付けられないということは、すなわち試合後の監督、選手へのインタビューができないということになる。

高校野球の試合時間はほぼ二時間。その二時間の間に、劇的瞬間をカメラにおさめ、応援席の面白いネタを拾い、試合で活躍した選手への質問を考え、戦評を書く。「なーんだ、四つしかやることないじゃん」と思った人、鉄拳が下りますよ！

そんなこんなでスタンド内を走り回っているうちに色白が自慢だった私の肌は、こんがりを通り越して真っ黒になってしまった。支局内では「ついに野倉が女を捨てた」とまで言われている。

こう続けると、私がずいぶんと悲惨な生活を送っていると思われるかもしれない。確かに二十三歳の女の子としては不満も多々あるが、それを吹き飛ばすようなことがあった。七月十六日、初めて署名入りで記事が載った。「青春譜」といって一人の球児の野球人生にスポットをあてるカコミの記事だ。

私は選手からコーチに転身という経歴の持ち主を選んだ。試合前からかなり彼に肩入れしていたが、試合終了後についに感極まって泣きながら取材をした。彼のことを何とかして文字にしたい、とにかく自分が感じたままに記事を書いた。それが記者として良かったのかは分からない。しかし、書き上げた記事が紙面に載ったとき、それまで溜まっていた鬱積がカラリと浄化された気がした。

一人の球児を追いかけたことで、私も階段を上がらせてもらったのだと感じた。高校野球が登竜門と言われる由縁が少し理解できたように思う。

一対一でぶつかって、じっくり話を聞き、時には涙を流して、一本の記事を作品として作り上げる。この作業を未熟ながらやり遂げ、また新たなエネルギー源を手に入れた。

さあ、明日も野球だ。新人記者の登竜門とやらを、くぐり抜けてみせますか。高校球児の熱情をバネにして。

（平成16年法学部卒）